令和７年度 高岡龍谷高等学校 学校評価 1	
重点項目	DX 推進（デジタルトランスフォーメーションの促進）
重点課題	デジタル教育の充実と ICT 環境の強化
現　　状	1 SNS スクールを設立後、動画制作講座を導入し、生徒が情報発信やリテラシーを学ぶ機会が増えた。 2 デジタル・ハリウッド大学との連携講座により、クリエイティブ分野での専門的な学びが充実。 3 デジタルクリエイトラボを新設し、ハイスペック PC、液晶タブレット、ドローン、e スポーツ機材などを導入。生徒が最新のデジタル機器を活用できる環境が整備された。
達成目標	デジタル機器を活用した授業および課外活動の参加率を 80%以上とする。
方　　策	1 SNS スクール講座やデジタル・ハリウッド大学との連携講座を継続・拡充し、専門的な学びを強化する。 2 デジタルクリエイトラボの設備を活用した実践的な授業やプロジェクト型学習を推進する。 3 ドローンや e スポーツなどの最新技術を活かしたクラブ活動やイベントを開催し、デジタル体験の機会を増やす。
評　　価	【評価】(B) デジタル教育のさらなる深化と定着を図ることが課題となる、デジタルクリエイトラボを活用した実践的なプログラムを拡充し、クリエイティブ活動の機会を増やした。 また、教員の DX スキル向上を目的とした研修を継続的に実施し、授業での活用頻度を高めた。さらに、生徒が自主的にデジタル機器を活用できるよう、プロジェクト型学習や発表の場を増やすことで、主体性と創造力を育成できた。
次年度への課題	デジタルクリエイトラボの設備は整備されたものの、授業・課外活動での活用頻度には教員間・クラス間で差が残っている。次年度は、活用事例の共有、授業モデルの開発、機器利用のルール整備を進め、全校的な活用の底上げを図る必要がある。また、連携講座やイベントを継続しつつ、年間を通した体系的なデジタル教育プログラムの構築が課題となる。

令和７年度高岡龍谷高等学校 学校評価 2	
重点項目	進路支援（生徒一人ひとりの進路実現の支援）
重点課題	進学・就職指導の充実と進路決定率 100%
現　状	1 進路決定率 100%を維持しており、生徒一人ひとりに合った進路支援が行われている。 2 普通科特進コースは大学進学率約 90%である。 3 普通科クリエイトコースは進学率約 60%であり、多様な進路選択が見られる。 4 調理科は進学 60%、就職 40%と分かれており、専門性を活かした就職率の高さが特徴である。
達成目標	進路決定率 100%を維持しつつ、進学・就職の質の向上を図る。
方　策	1 コースごとの特色に応じた進路指導を強化し、個別面談や進路ガイダンスを充実させる。 2 大学や企業との連携を深め、進学・就職先の選択肢を拡大する。 3 外部講師による講演や職業体験を実施し、進路意識を高める。
評　価	【評価】(A) 本年度は、進路決定率 100%を達成し、各コースにおいて計画に沿った成果が着実に表れた。普通科では、特進コースが大学進学率 91.3%と高い水準を維持し、クリエイトコースも昨年度の進学率 61.1%から 70.76%へと向上し、多様な進路選択を実現する体制が強化された。調理科においても、昨年度の進学 40%・就職 60%から、今年度は進学 53%・就職 47%へと変化し、専門技術をさらに深めるために上級学校を志望する生徒が増加している。 これらの成果は、各コースでの指導体制の充実や個別支援の強化が進んだ結果といえる。一方で、進学・就職先の質の向上、生徒一人ひとりの希望に応じたきめ細かな進路指導のさらなる充実が、次年度に向けた課題として挙げられる。
次年度への課題	本年度は進路決定率 100%を達成し、各コースで進学率の向上や専門性を生かした進路選択の広がりが見られた。これらの成果を踏まえ、来年度は進路指導の質的向上が課題となる。生徒一人ひとりの希望や適性に応じた個別支援の充実に加え、進学・就職先の質の向上を図るための情報提供やマッチングの強化が求められる。また、コースの特色を生かした指導体制の安定化、キャリア教育の体系化、進路データの活用による計画的な支援体制の構築を進めていく必要がある。

令和７年度 高岡龍谷高等学校 学校評価 3	
重点項目	社会性の育成（人間関係構築能力の向上）
重点課題	人間関係構築のための挨拶の徹底
現　　状	1 登下校時に挨拶を交わす生徒はいるが、全体的には習慣化が不十分。 2 教員からの声掛けには応じるものや、生徒同士での自主的な挨拶は増えてきている。 3 部活動や委員会では比較的活発に挨拶が行われているが、クラス内では幾分消極的な傾向が見られる。達成目標 挨拶習慣が定着した生徒の割合を 90%以上とする。
方　　策	1 教員が率先して明るく挨拶し、生徒に模範を示す。 2 挨拶キャンペーンやスタンプラリーを実施し、挨拶への意欲を高める。 3 挨拶ができた生徒を積極的に称賛し、校内放送や掲示板で紹介する。
評　　価	【評価】(A) 挨拶の定着については、登下校時や部活動では一定の成果が見られる一方、クラス内での挨拶は依然として消極的な傾向が残っている。教員の働きかけには応じる生徒が多く、基盤は整いつつあるため、今後は生徒自身が主体的に挨拶を交わせる環境づくりが課題となる。キャンペーンや称賛の仕組みを活用し、挨拶習慣の定着率 90%以上を目指して取り組みを継続する。
次年度への課題	挨拶の定着率向上には一定の成果があったが、クラス間のばらつきが大きく、クラス内での挨拶の活性化が課題として残った。来年度は、クラス担任による日常的な働きかけの強化と、委員会・生徒会との連携による全校的な取組の一体化を図ることで、挨拶習慣の均質化と定着を目指す。